

フッサール現象学とハイデルベルク学派

——自己意識と反省——

中 村 拓 也

「根本概念を示す一つの語が、近代哲学の歴史のなかで主役を演じていたとすれば、それは『自己意識』である」⁽¹⁾。これは一九七〇年のヘンリッヒ (D. Henrich) の論文「自己意識——一つの理論への批判的導入」(以下「自己意識」論文と略記) の劈頭の言である。確かに、自己意識はデカルト以降の近代哲学の中心的問題の位置を占めてきた。しかし、二十世紀以降の現代哲学は、必ずしも自己意識をその中心問題としてきたと言ふことはできないだろう。むしろ主観性や自己意識といった認識論的思考の枠組みによって強く刻印されている概念からの解放こそがその主題であったとさえ言うことができるかもしれない。

しかし、ヘンリッヒはこうした自己意識が背景に退きつつある傾向に抗して、繰り返し自己意識の問題を取り上げ、根本問題として取り扱っている⁽²⁾。そして、前世紀の変わり目に誕生したフッサール (E. Husserl) の現象学も意識の哲学、主観性の哲学として知られている。この意味で、両者は同じ研究の方向に向かっているはずである。しかし、奇妙なことに、ヘンリッヒを嚆矢とするハイデルベルク学派 (Heidelberger Schule) は、一様にフッサールの現象学に対して批判的な評価を下している。しかも、その批判は、フッサールが主観性の問題を、その中でもとりわけ

枢要な自己意識の問題を正しく取り扱うことができなかったという点に向けられているのである。それどころか、あの論者からは「フッサールは問題の次元を意識していなかった」⁽³⁾とさえ言われている。しかし、そもそもこうした批判は正鵠を得ているのだろうか。これこそがここで検討されるべき課題である。

したがって、本論考の目的は、ハイデルベルク学派による批判にさらされているフッサール現象学の自己意識論の検証を通して、その批判の正否を明らかにした上で、自己意識という問題構制に現象学が独自の寄与をなしているということを論証することである。その際、ハイデルベルク学派の批判的検討によれば、ヘンリッヒが呈示する「自己意識の反省理論」⁽⁴⁾の典型とみなされる議論をフッサールが行っており、そのためにフッサールの自己意識論が厳しい批判にさらされているということを詳しく検討する。

論証の手続きは以下の通りである。まず、ヘンリッヒを嚆矢とするハイデルベルク学派の基調をなしている主張を、ヘンリッヒが古典的研究『フィヒテの根源的洞察』で定式化した、いわゆる「自己意識の反省理論」をとりあげることによって整理する。次いで、ハイデルベルク学派によるフッサール批判をとりあげ、その特徴を明示する。最後に、こうしたハイデルベルク学派が典拠とする議論とは異なる議論を、フッサールが行っていることを指摘し、その上で、意識のもつ時間的構造にまで分け入ったフッサールの緻密な分析は、フッサールに向けられてきた批判に十分に答えるものであり、それどころかそこに自己意識の問題への現象学独自の寄与を見出すことが可能であるということを示す⁽⁵⁾。

一 自己意識の反省理論

主観性の哲学の諸問題の中で、その中心に座を占めている自己意識の問題について、現在最も緻密かつ詳細な分析のうちの一つを呈示しているのは、いわゆるハイデルベルク学派である。しかし、このハイデルベルク学派という名称は、それほど人口に膾炙しているとは言えない。そこで、ハイデルベルク学派の基本的主張に取り組む前に、この学派の名称の由来とそこに属する哲学者を紹介することにしたい。

ハイデルベルク学派という呼称は、その学派に属するとされる哲学者によって唱道されてきたものではない。それどころか、このハイデルベルク学派は、その掉尾を飾ると目されているグロイ (K. Gloy) 自身が述べているように「けつして現実の学派形成には至らなかった」⁽⁶⁾。そうではなくて、このハイデルベルク学派という呼称は、もともとはヘンリツヒ、ポタースト (U. Pothast)、クラーマー (K. Cramer) らの議論を批判する側から、すなわち、言語分析の手法によってこの学派の議論を批判したトゥーゲントハット (E. Tugendhat) によって名づけられたものである⁽⁷⁾。

先に触れたグロイによれば、この学派に属するのは、ヘンリツヒ、ポタースト、クラーマー、フランク (M. Frank)、そしてグロイ自身である⁽⁸⁾。そして、ヘンリツヒと並んでハイデルベルク学派の重要な哲学者であるフランクが認めているとおり、ヘンリツヒ、ポタースト、クラーマーの研究の「共通の源泉はもちろん自己意識という主題についてのデーター・ヘンリツヒのハイデルベルクでのゼミナールと講義である」⁽⁹⁾。このようにその理論的基盤をハイデルベルクでのヘンリツヒのゼミナールと講義からならんかの仕方を受け取った一群の哲学者がハイデルベル

ク学派の名でよばれている。では、このハイデルベルク学派をまさしく学派たらしめている基調となる統一的主張とは一体何か。以下では、ヘンリツヒが明らかにした「自己意識の反省理論」の基本的主張を検討することでそれに答えることにしたい。

「自己意識の反省理論」は「さしあたり思考の主観を想定し、こう強調する。この主観は自己自身と絶えず関係している、と。そうしてさらにこう主張する。この関係は、主観が自己を自己自身の対象とすること、根源的には対象に関係づけられている表象するはたらきという活動を自己自身へと振り向け、そうして活動と活動の成果との同一性という唯一の事例を成し遂げることによって成立する、と」¹⁰⁾。

「自己意識の反省理論」は、本来対象とかわる活動である表象を、主観そのものへと向けることによって、表象する主観が、その主観自身を表象する、すなわち、表象する主観が表象された表象する主観に関係する、と主張する。また、前者は「自我—主観」、後者は「自我—客観」ともよばれる¹¹⁾。しかも、この「自我—主観」と「自我—客観」との「同一性と唯一の事例」が成立することによって、自我 \parallel 自我、一層正確に言えば、「自我—主観」 \parallel 「自我—客観」という等式が帰結する。

しかし、そもそも自我 \parallel 自我という等式が反省から帰結することなどありえるのだろうか。その問いを巡って「自己意識の反省理論」は極度の困難に直面することになる。この困難をヘンリツヒは抉出する。万一その等式が成立しているならば、事態はこうである。

「反省を遂行する者は、それ自身すでに両者、知る者であり、知られる者でなければならぬ。したがって、反省の主観は自我 \parallel 自我という等式の全体をみだす。だが、反省によってそれ〔等式〕をはじめて成立するはずである」¹²⁾。

もしこうした反省理論の立論が妥当であるならば、反省によってはじめて成立するはずのその等式を「反省を遂行する者」は反省に先立つてすでにみたしていなければならないことになる。しかし、こうした主張が成り立たないことは明らかである。したがって「自己意識の反省理論」は「課せられてきた問題の完全な解決を前提としている」^[13]循環論証に陥つてしまっていることが明らかになる。あるいはまた同じ欠陥が別の仕方でも示される。

「反省理論はこう仮定する。自我は自己」へと廻り関係することによって自己についての知識を得る、と。さてしかし、なんらかの主観がなんらかの客観についてはつきりした意識を獲得するということでは、自我||自我という意識を説明するためには十分ではない。この主観は、その客観が自己自身と同一であるということもまた知っているでなければならぬ^[14]。しかし「この同一性の知識は第三の審級の知らせによってそれ〔主観〕に認められることはない。というのは、自己意識という現象は自己自身との無媒介的関係を証示するからである」^[15]。

万一、自我||自我という等式がみだされているということが、つまり自我—主観と自我—客観との同一性が、第三の審級によって、たとえば一層高次の反省によって証示されると仮定するならば、さらにその一層高次の反省を遂行するものと、それによって反省されるものとの等式がどのように成立するかを明らかにするために、さらに一層高次の反省が要請されることになる。ここから帰結するのは無限背進であることは明らかである。したがって、反省理論は、高次反省に訴えることによって自らの課題を解決することができない。

以上見てきたように、反省理論は自分では解決することができない難問に突き当たっている。というのは、反省理論は次のような二つの支持することができない帰結のどちらかに不可避的に至ることになるからである。すなわち、反省理論の帰結は、反省を遂行することによってはじめて解明されるはずの自我||自我という等式を反省に先立つて前提するという循環に陥るか、自我||自我の等式を達成することができないかのどちらかである。したがって、結局

「自己意識の反省理論は自我現象を説明せずに前提とするか、あるいは、それ〔自我現象〕を破砕してしまうかのどちらか」⁹⁸に終わってしまう。

以上がヘンリッヒの呈示する「自己意識の反省理論」とその困難である。この議論を基本的に踏襲していることがハイデルベルク学派の学派としてのゆるやかな統一の基礎をなしているのである。ハイデルベルク学派によって、フッサールの現象学はこうした「自己意識の反省理論」の典型例を示すものであるとみなされ、批判的に検討されることになる。次にそのハイデルベルク学派のフッサール批判を見ていくことにしよう。

一 フッサール批判

以下では、ハイデルベルク学派のフッサールへの評価、否、駁撃を見ていくことにしたい。さて、ではまずヘンリッヒの所論を見てみることにしよう。しかし、ヘンリッヒ自身のフッサールへの言及は極めてわずかなものに過ぎない。ヘンリッヒは『フィヒテの根源的洞察』の末尾で、フッサールの超越論的現象学に触れている。「フッサールの超越論的現象学は、多くの実り多い特質にもかかわらず、反省としての自我の理論の批判に屈するのである」⁹⁹。フィヒテの自己意識論に焦点を当てた研究であるという性格上、『フィヒテの根源的洞察』の中に、フッサールについて言及はそれ以外に見出すことはできない。また、「自己意識」論文でもブレンターノ以降の「修正された現象学のすべての立場」への批判的言及が見られるだけである¹⁰⁰。そこで以下では考察の範囲をハイデルベルク学派全体へと広げることにしよう。

ハイデルベルク学派は極めて多くの哲学説を議論の俎上に載せているけれども¹⁰¹、いずれにせよこのフッサールに

対する否定的評価は、それ以後ハイデルベルク学派に共有されている。たとえば、ヘンリッヒの上で引用したフッサールに対する否定的評価が書かれてから約三〇年後に、グロイはフッサールについて、次のようなほぼ同じ内容の文言を記している。「そしてフッサールの自己意識の分析もまた、個別的には実り多いものであり、いかに術語的かつ事象的な差異化に寄与しようとも、決定的な点で伝統的反省モデルを超えていないのである」²⁰。

さて、ハイデルベルク学派によるフッサール批判の具体的な検討に入る前に、その批判の一般的特徴をあらかじめ述べておくことにする。ハイデルベルク学派がフッサールの現象学を論じる際に依拠するテキストとしては、主にフッサール現象学の初期の著作である『論理学研究』、そして、補助的に『イデーニー』と『内的時間意識の現象学』が論及されるにすぎない。その意味で「狭いテクスト上の基礎」²¹にしか拠っていないと言うことができる。この点を指摘しておく必要がある。

以上の一般的特徴を踏まえた上で、ハイデルベルク学派のフッサール批判を具体的に検討していくことにしよう。フッサール現象学を論じる際にハイデルベルク学派が好んで取り上げるのが、内的知覚という概念である。それと関連して『論理学研究』の第五研究で呈示される三つの意識概念が取り上げられ、とりわけ第二の意識概念が批判的に検討されることになる。以下にその三つの意識概念を挙げることにしよう。

「一、経験的自我的全実的現象学的成素としての、体験流の統一における心理的体験の織り合わせとしての意識。〔改行〕二、自分の心理的体験の内的覚知としての意識。〔改行〕三、あらゆる『心理的作用』あるいは『志向的体験』にとつての要約的名称としての意識」(XIX 356)。

この三つの意識概念のうちの第二の意識概念に関連して内的意識あるいは内的知覚という概念がフッサールによって呈示される(XIX 365)。そして、この内的知覚という概念こそがハイデルベルク学派からの批判的的となる。以

下では、フランクとグロイによる内的知覚に対する批判的検討に耳を傾けてみることにしよう。

フランクは上の三つの意識概念を挙げた後、フッサール自身が内的知覚を論じる部分 (S. 26) を引用しながら、次のように論じる。「当然、現在の問いの連関で興味を引くのはとりわけ『意識』の第二の意味である。意識はここで『内的意識』、『内的知覚』ともよばれている。……内的知覚が意味するのは、それ〔内的知覚〕は現勢的に現前的な体験に『随伴し』、『その〔内的知覚の〕対象としてのそれ〔体験〕に関係している』ということである」²⁸⁾。

そして、フランクはこの箇所に依拠してこの内的知覚をさらに詳細に分析する。「この引用では、『随伴する』と『対象』という二つの語を強調するべきである。『随伴する』は、随伴するものと随伴されるものとの間の非同種性 (Nicht-Einheitlichkeit) という相関を前提とする関係の表現である。それには随伴されるものの対象性について語ることが照応している。すなわち、内的知覚によって主題化された意識はそれ〔内的知覚〕に対して客観の役割をしている」²⁹⁾。

なるほど、フランクが指摘するとおり、フッサールがここでいう内的知覚としての意識概念は、「自己意識の反省理論」が明らかにした事態の典型を示しているように思える。しかも、グロイによれば、フッサールは内的知覚という概念にこうした欠陥が存在するにもかかわらず、内的意識を十全的知覚にまで高めてしまう。「唯一の意識統一における二つの作用の同時的存在をフッサールは、絶対的なずれのなさに基づいて『十全的知覚』とよぶ。それは、内的知覚を意味している」³⁰⁾。ここでグロイは「十全的知覚」の内実をなす「二つの作用の同時存在」を「覚知する作用」とそれによって「覚知される」作用の「共在」と理解している³¹⁾。

しかし、こうした十全的知覚としての内的知覚が成立していないことは明らかであるとされる。この点に関するフランクとグロイの所論を見ることにしよう。フランクはこう述べている。十全的知覚としての内的知覚を成立させる

「非对象的自己」熟知 (Vertrautheit-mit-sich) は無媒介的なものとしてしか考えることができない。それは随伴するといふ相関を定言的に排除するのである」¹⁰⁴。しかし、すでに触れたように、フランクによれば、内的知覚はなるほど現勢的意識そのものを知覚するのではあるが、たとえ内的知覚によって捉えられた現勢的意識であろうとも「対象」であることを免れないのである。同じ事態をグロイは一層明瞭に語っている。「フッサールは内的意識を内的知覚として理解する。しかし、知覚は原理的に志向的に構造化されており、したがって、それ〔知覚〕は内的知覚としても志向構造に従属している」¹⁰⁵。というのは、たとえ内的知覚であろうとも知覚であるかぎりには「志向的に構造化」されているのであり、それゆえ知覚するものと知覚されるものとの、そしてフランクが上で強調したように、随伴するものと随伴されるものとの位置偏のずれが不可避免的に生じており「絶対的なずれのなさ」が生じる余地はありえないからである。

フランクとグロイによるフッサール批判を検討することによって次のことが明らかになった。『論理学研究』でのフッサールの内的知覚の議論は、フッサールの目指す十全的知覚を達成するどころか、内的知覚にもやはり抜きがたく志向的構造が刻印されているために従来の議論と同じく反省理論の困難を解決することに寄与してはいない、と。しかし、すでに述べたように、ハイデルベルク学派からの批判は「狭いテクスト上の基礎」にもとづくものであった。しかも、現象学の分析の一部分を取り出し強調することで、現象学の成果の不当な一面化と矮小を行うものである。つまり、ハイデルベルク学派は知覚を徹頭徹尾志向的に構造化されたものであると捉えることによって、そうした解釈の枠組みに収まりきれない現象学の可能性を等閑視するか不当なものとして破棄するに至っている。

以下での考察が示すことになるように、ハイデルベルク学派が批判の典拠とするのと同じテクストを丹念に繙くことで異なる可能性をフッサール現象学が蔵していることを示すことができる。フッサールの分析は論難されている志

向的に構造化された知覚につきるものではなく、むしろハイデルベルク学派が主題とする自己意識と反省の解明へと向かう分析もまたすでに『論理学研究』に見出すことができるのである⁴⁰。

そこで以下では、まず『論理学研究』でのフッサールが展開している異なる方向性を検討する。そして、ハイデルベルク学派の自己意識と反省についての所論の検討を通して、そこで目指されるべき自己意識の内実を明らかにする。それを踏まえた上で、ハイデルベルク学派の呈示する自己意識と反省の分析と親近性をもつ思索とそれを超えていく独自の寄与を『内的時間意識の現象学』でのフッサールの時間論に求めることにしたい。

三 自己意識と反省

ここではまずハイデルベルク学派の批判に対する反証を、フッサールが『論理学研究』でおこなっている、上で見たのとは異なる可能性を展開する分析に拠りながらおこなう。次いでヘンリッヒの所論を見ることでハイデルベルク学派の自己意識概念の内実を明らかにする。その上で『内的時間意識の現象学』でのフッサールの自己意識と反省についての分析を読み解くことによって、自己意識と反省の問題についての現象学独自の寄与を明示することにした⁴¹。

さて、これまでに見てきたように、フランクとグロイが典拠として論じる箇所については、フッサールが「自己意識の反省理論」の困難を免れていないという解釈も可能であり、強い説得力をもっているかもしれない。もし内的知覚が志向的なものであり、自己自身へと向けられた知覚としての反省にすぎず、結局フッサールの分析は知覚としての反省によって自己意識を語ろうとする試みにすぎないとするならば、「フッサールは問題の次元を意識していなか

った」という評言にも一定の妥当性があるかもしれない。しかし、『論理学研究』での内的知覚の概念はまだ確定したのではなく、生成の途上にある。そのためこの内的知覚は多義的に解釈することを許すのであり、フッサール自身の記述そのものにもある程度の動揺が認められる⁸⁰。そこに反省理論の困難を免れるフッサールの思索をあるいは少なくともその萌芽を見出すことができる。

フッサールは『論理学研究』のなかで知覚と体験を区別することによってはつきりと非対象的体験を認めている。「感覚と同じくそれ〔感覚〕を『統握する』あるいは『統覚する』作用はこの場合体験されているが、それらは対象的には現出しない。それらは見られず、聞かれず、なんらかの『感官』によって知覚されない。他方で、対象は現出し、知覚されるが、体験されていない」(XIX 399)。これこそが内的知覚という概念が孕む異なる可能性である。つまり、ここで「体験」という術語によって名指されている事態こそが問題となっている内的知覚の孕むもう一つの内実なのである。そしてフッサールはここで従来の知覚では捉えることができなない事象にはつきりと気づいている。

そして『論理学研究』以降、この内的知覚が腹藏していた可能性は次の二つの概念へと差異化されることになる。「イデーニー」での反省を意味する「内在的知覚」と、『内的時間意識の現象学』での先反省的、非対象的意識を意味する「内的意識」あるいは「原意識」とがそれである。

しかし、これまで見てきたとおり、フランクは内的知覚をあくまで対象の知覚、すなわち上の区分に従えば「内在的知覚」として捉えることに拘泥している。そのためこうしたフッサールがおこなう自己意識と反省の問題の解決の試みを「アポリア的構築」にすぎないと断ずることになる⁸¹。このように現象学の分析を、ある意味ではフッサール以上に徹底して知覚の分析とみなし、それ以外の可能性を排除することは、反省を可能にするものとしての自己意識の分析という現象学の可能性を排除してしまうことになる。つまり、それはニー(T.N.)が指摘するとおり、「内的

意識（先対象的意識としての原意識）」と「内在的知覚（対象的意識としての反省）」とを混同してしまうという危険にさらされることになり⁸⁹、ついには内的知覚という概念の孕む、自己意識の問題にとって極めて重要な可能性が失われてしまうということを意味するのである。

先に触れたように、フッサールは『論理学研究』で内的知覚とよんでいた事態に孕まれていた可能性を『内的時間意識の現象学』で確固とした概念へと彫琢している。そして、それが「印象的『内的意識』」(X 110)あるいは「原意識」(X 116)とよばれることになる。この原意識の分析こそがハイデルベルク学派からの批判に答え、さらには「自己意識の反省理論」の困難を解決する現象学独自の試みを呈示するのである。しかも、この原意識と反省の分析には、ハイデルベルク学派が呈示する自己意識と反省という事態についての記述と極めて強い親近性がある。それに加えてハイデルベルク学派がけつして考慮することがない、意識の時間的構造をも考慮に入れることで、フッサールの現象学は一層具体的な分析とその成果を呈示しているのである。

そこでまず自己意識と反省についてのヘンリッヒの説明を見ることにしたい。ヘンリッヒは自己意識についてこう述べている。「自己意識という唯一の事例では、思考と思考されるもの、所有と所有されるもの、ノエシスとノエマが相互に区別されない。自我が存在する場合には、両者が、主観とその〔主観の〕対象としてのこの主観との両方が現に存在するのである」⁹⁰。「自己意識という唯一の事例」については、ヘンリッヒだけではなく、フランクが無媒介的な「非対象的自己熟知」とよんでいたことも想起されるだろう。それに対して、反省についてはこう述べている。「『反省』はすでに眼前にある知がことさらにつかまえられ、したがって明確になったということだけを意味する」⁹¹。したがって、自己意識という「非対象的自己熟知」が成立していなければ、「眼前にある知」を捉えるにすぎない反省によって、反省するものと反省されるものとの等式が成立することはありえなかつたのである。換言すれ

ば、反省するものと反省されるものとの等式が反省によって成り立つならば、その可能性の条件としての自己意識が成立していなければならないのである。

翻ってフッサールはこうした事態についてどのように述べているのか。まず原意識について見ることにしたい。「印象的『内的意識』」は「そのつどの原印象と具体的に一つであり、それと不可分」(X 110a)である。「把持的位相が先行する位相を対象とすることなく意識しているように、原与件もまたすでに——しかも『今』という独特の形式において——対象的であることなしに意識されている」(X 110c)。そして、この原与件の非対象的意識こそが「原意識」であり「まさにこの原意識が把持的変様へと移行するものである」(ibid)。それに対して、反省についてはこう述べている。「私はそれ〔経過した位相〕を所持し続けているので、ある新しい作用によってまなざしをそれ〔経過した位相〕へと向けることができるのである」(X 110)。その新しい作用が「反省(内在的知覚)」(ibid)である。したがって、原意識において原印象が原与件として非対象的に意識され、「原意識が把持的変様へと移行する」。つまり、把持、「縦の志向性」(X 8)が、原意識を、把持的に変様し、いわば最低次の対象性を帯びた仕方で繋ぎ止める。そして、把持が原意識を繋ぎ止めることによってはじめて反省はその繋ぎ止められた当のものへと、つまり把持的変様を被った原意識へとまなざしを向けることができるのである。それゆえ次のように言われる。「反省と把持は根源的構成において当該の内在的与件の印象的『内的意識』を前提としている」(X 110)。換言すれば、反省に先んじて成立している先反省的自己意識である原意識こそが、反省の可能性の条件をなしているのである。

これまでに論じてきたことから明らかなように、フッサールの現象学とハイデルベルク学派の間に強い親近性を見出すのは難しいことではないだろう。両者の自己意識への取り組みは同じ方向を旨指すものである。しかし、ハイデルベルク学派の議論が自己意識と反省の関係をなお「自己意識の反省理論」の困難として描出し、自己意識を抽象的

かつ否定的な仕方でも論じているのに対して、現象学は、非対象的意識である原意識と対象的意識である反省との関係の分析に、けつしてハイデルベルク学派が顧慮することがなかった時間性の構造を見出し一層具体的に考察している。その際重要な役割を果たしているのが把持である。把持こそが「そのつどの原印象と具体的に一つであり、それと不可分」である原意識、すなわち、ハイデルベルク学派の言う「非対象的自己熟知」を、内在的知覚としての反省へと架橋するための独特の機能を果たしているのである。つまり、把持は時間的位置価のずれがない、一層正確に言えば、時間のうちにはない自己意識に、それとは異なる時間的位置価を割り当てるといふ機能を果たしているのである。このように現象学は、原意識を流れとして現出させる把持こそが非対象的意識である原意識と対象的意識である反省とを架橋していることを明らかにしたのである。このことによつて、フッサールは原意識で成立している自我 || 自我の等式とその等式が反省によつて確認されることになるといふ事態を把持の時間化機能を見出すことによつて具体的に抉出している。これこそが自己意識と反省の問題構制への現象学の独自の寄与なのである。

む す び

フッサール現象学の主観性理論、とりわけ自己意識論はハイデルベルク学派から反省理論の典型であるとして厳しく批判されてきた。しかし、本論考が明らかにしたように、このようなハイデルベルク学派の批判は、フッサールの自己意識論の不当な限定と敷衍に基づくために妥当しないものである。むしろフッサール現象学は、自己意識論に独自の寄与を行い、ハイデルベルク学派の看過する時間意識研究に立脚して自己意識と反省の問題構制に新たな局面を開いていることが確認されたのである。そして、こうして開かれた現象学的自己意識論は『内的時間意識の現象

学」から、本論考では触れることができなかったフッサールの最後期の時間論に至るまでさらに緻密に攻究されつづけることになるのである。

註

引用に際しては、フッサールのテクストはフッサール全集 (*Husserliana*) により文中に直接全集の巻数をローマ数字でページ数をアラビア数字で挿入した。引用文中の「」は引用者による補足である。ゲシュペルトなどによる強調は引用によって脈絡から切り離されていることに鑑みすべて無視されている。また、フッサール全集 XIX 巻は二分冊であるが頁数は通し番号で打たれているので分冊数を示すことはしなかった。

- (1) Heirich, D., *Selbstbewusstsein. Kritische Einleitung in eine Theorie*, in: *Hermeneutik und Dialektik*, hrsg. von Bubner, R., Cramer, R. und Wiel, J. C. B.: Mohr, 1970, S. 257.
- (2) ヘンリッヒの現代思想のなかでの位置づけについては以下の研究の特に第一章が詳しく論じている。Freundlieb, D., *Dieter Henrich and Contemporary Philosophy. The Return to Subjectivity*, Ashgate, 2003, pp. 1-32.
- (3) Frank, M., *Die Unhintergebarkeit von Individualität*, Suhrkamp, 1986, S. 45.
- (4) この「自己意識の反省理論」という名称の他に、「自我の反省理論」や「反省モデル」といった呼称で同じ事態がよばれているが、本論考では基本的に「自己意識の反省理論」あるいは単に反省理論とよぶことにする。
- (5) ヘンリッヒの公刊された著作の中に、はっきりとテクストの箇所を挙げながらフッサールの時間意識論を論じたものを見出すことはできなかった。ただし、フランクによれば、ヘンリッヒは現在未刊の『自己存在と意識 (Selbstsein und Bewusstsein)』のなかで、自らの提示するモデルのフッサールのモデルに対する優位を指示している、とのことである (Frank, M., *Zeitbewusstsein*, Neske, 1990, S. 122 f.)。
- (6) Gloy, K., *Bewusstseinstheorien. Zur Problematik und Problemgeschichte des Bewusstseins und Selbstbewusstseins*, Alber, 1998, S. 17.
- (7) Cf. Tugendhat, E., *Selbstbewusstsein und Selbstbestimmung. Sprachanalytische Interpretationen*, Suhrkamp, 1979, S. 10, 26, 27) ベトウーゲントハットは「ヘンリッヒ、ポタースト、クラマーを「自己意識理論におけるハイデルベルク学派」(ibid., S. 10) とよんでいる。

- (8) 自己意識の問題についてのそれぞれの論者の代表的な研究を以下に挙げておく。Henrich, D., *Fiches ursprüngliche Einsicht*, Klostermann, 1967, Ders., *Selbstbewusstsein. Kritische Einleitung in eine Theorie*, in: *Hermeneutik und Dialektik*, hrsg. von Bubner, R., Cramer, R. und Wielh, J. C. B.: Mohr, 1970, S. 257-284. Ders., *Fichtlinien. Philosophische Essays*, Suhrkamp, 1982. Pohast, U., *Über einige Fragen der Selbstbeziehung*, Klostermann, 1971. Cramer, K., *Erlöbnis. Thesen zu Hegels Theorie des Selbstbewusstseins mit Rücksicht auf die Aporien eines Grundbegriffs nachhegelscher Philosophie*, in: *Hegel-Studien*, Beiheft 11, 1974, S. 537-603. Frank, M., *Die Unhintergebarkeit von Individualität*, Suhrkamp, 1986. Ders., *Selbstbewusstsein und Selbsterkenntnis*, Philipp Reclam, 1991. Gloy, K., *Bewusstseinstheorien. Zur Problematik und Problemgeschichte des Bewusstseins und Selbstbewusstseins*, Alber, 1998.
- クローイは、ハイデルベルク学派に属するわけではないが、その周辺に位置する哲学者としてデュージング (K. Düsing) とヴァントシユナイター (D. Wandschneider) を挙げている (Gloy, K., op. cit., S. 16f.)。代表的な研究はそれぞれ以下の通りである。Düsing, K., *Selbstbewusstseinsmodelle. Moderne Kritiken und systematische Entwürfe zur konkreten Subjektivität*, Wilhelm Fink, 1997. Wandschneider, D., *Selbstbewusstsein als sich selbst erfüllender Entwurf*, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Bd. 33, 1979, S. 499-520.
- デュージングの議論を批判的に論じる研究として以下のものを挙げる事ができる。日暮陽一「自己意識のアポリアーデュージング『自己意識の理念的発生史』の批判的紹介」(新田義弘・河本英夫編『自己意識の現象学』世界思想社、二〇〇五年、所収)七四—九一頁。日暮は、デュージングが行う現代の自己意識論へのさまざまな論難に対する反批判の妥当性を認め、高く評価しつつも、自己意識についてのデュージング自身の新しい提案に対しては、「地平概念の不適切な使用」(前掲論文、八五—六、九〇頁)を行う欠陥のある議論であることを指摘している。
- (9) Frank, M., 1986, S. 35. フランクは、「トウーゲントハットの批判的な命名を踏まえて、別の箇所では括弧付きで「ハイデルベルク学派」という呼称を用いている (ibid., 26.)。
- (10) Henrich, D., 1967, S. 11.
- (11) Cf. ibid., S. 12.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid., S. 13.

- (14) Ibid.
- (15) Ibid.
- (16) Ibid.
- (17) 自己意識の問題を離れば、フッサールの『第一哲学』第一部での批判的歴史史でのフッサールの哲学史を論じた論文がある。⁹⁰ Henrich, D., *Über die Grundlagen von Husserls Kritik der philosophischen Tradition, Philosophische Rundschau*, 6, 1958, S. 1-26.
- (18) Henrich, D., 1967, S. 50.
- (19) Henrich, D., 1970, S. 261. ここでは現象学全般が「意識をそのつどの個別的な内容あるいは与件の自己自身に対する関係として解釈する」(ibid.) 取り組みである、とされている。
- (20) 註の(8)で挙げたハイデルベルク学派の著作の中では、たとえば、プラトン、アリストテレス、ヒューム、カント、フイヒテ、ヘーゲル、ナトルフ、ブレンターノ、デイルタイ、フッサール、サルトル、ラカンの議論が論じられている。
- (21) Gloy, K., op. cit., S. 203.
- (22) Zahavi, D., *Inner Time-Consciousness and Pre-reflective Self-awareness*, in: D. Welton (ed.), *The New Husserl. A Critical Reader*, Indiana University Press, 2003, p. 158. ザハヴィは、ハイデルベルク学派のフッサール批判が、それ以降に公刊されたフッサール全集を考慮していない点を指摘している。さらには、いまだ全集に未収録の研究草稿が考慮されておらず、そうした資料を積極的に参照すべきである、と主張している。確かに、無限遡求の問題を主題の一つとする『ベルナウ草稿』や最後の『生ける現在』を扱うC草稿を参照することによって、フッサールが自己意識の問題を深刻に受け止め、精緻な分析を通して新たな視座を提供していることは強調されてしかるべきである。
- しかし、ハイデルベルク学派のフッサール批判に対する反批判をおこなうという目下の脈絡では、そうした未公開資料を典拠とすることなく、批判がおこなわれた時点で一般に参照可能であった資料を根拠として積み上げられてきたハイデルベルク学派の批判に対して、その当時未公開であった資料を根拠として反批判をおこなうのは必ずしも公平な態度とは言えない。本論考が以下で示すことになるように、その時点で利用可能であった『論理学研究』や『内的時間意識の現象学』に基づいてハイデルベルク学派の批判に十分に答えることができるはずである。
- (23) Frank, M., 1986, S. 43 f. なお、フランクからの引用文中に示されているフッサールからの引用箇所は表記の混乱を避

けるため制愛した。

- (24) Ibid., S. 44.
- (25) Gloy, K., op. cit., S. 295.
- (26) Ibid.
- (27) Frank, M., 1986, S. 44.
- (28) Gloy, K., op. cit., S. 293.
- (29) 『論理学研究』によりながらのハイデルベルク学派への反批判については、次の研究の当該箇所ですく論じられている。Nahavi, D., *The Three Concepts of Consciousness in Logische Untersuchungen*, in: *Husserl Studies* 18, 2002, pp. 57-59.
- (30) 実際フッサール研究者の間でもさまざまな解釈がおこなわれている。上に挙げたザハヴィの論文だけではなく、たとえばリー (Lee, N.-I.) も同じ箇所について異なる解釈を提示している (Lee, N.-I., *Edmund Husserl's Phenomenology of Mood*, in: N. Depraz and D. Zahavi (eds.), *Alterity and Facticity*, Kluwer Academic Publishers, 1998, pp. 103-120)。リーは問題となっているフッサールの三つの意識概念のなかの第二の概念、特に「内的知覚」をハイデルベルク学派と同じく「ある種の志向的体験」とみなしている (ibid., p. 106)。ただし、志向的体験としての知覚と非志向的体験としての感覚ははっきりと区別している (ibid., p. 107)。
- (31) Frank, M., *Was ist Neozstrukturalismus?* Suhrkamp, 1984, S. 317. グロイも同じように「原意識」について「この術語は明らかに困惑の表現を提示している」(Gloy, K., op. cit., S. 314) とのべている。ただしグロイは「原意識によつては、ただ否定的にそれ〔原意識〕は志向的構制をもたない」と言ふことができるとはしない (ibid.) と述べ、原意識という概念について一定の評価をこつてはいる。
- (32) Ni, L., *Urbewußtsein und Reflexion bei Husserl*, in: *Husserl Studies* 15, 1998, S. 95.
- (33) Henrich, D., 1967, S. 11.
- (34) Ibid., S. 12.